

審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2964 号	氏名	井上 雅文
審査担当者	主査 山木 宏一 (印) 副主査 平木 照之 (印) 副主査 白濱 正博 (印)		
主論文題目： Incidence of re-dislocation/instability after arthroscopic Bankart repair: analysis via telephone interviews (肩腱板鏡視下バンカート修復術後の再脱臼、動揺性の事象について：電話インタビューによる解析)			

審査結果の要旨 (意見)

習慣性肩関節脱臼に対する、鏡視下 Bankart 修復術 (ABR) はおおむね良好な結果を得ているが、接触スポーツ、上腕骨骨欠損、関節窩骨欠損を有する症例には術後再脱臼の危険がある。今回のこの論文で、上腕骨骨欠損 (Hill-Sacks Lesion) には鏡視下 Remplissage 法 (R法) を、関節窩骨欠損 (骨性 Bankert: 20%以上) の症例には、直視下 Bristow 法 (B法) を追加する事で ABR 術後の再脱臼を 0% にする事が出来た。

これは、臨床的にも大変有効な方法であると考え。今後も症例を増やして頂きたい。可能であれば、直視下 Bristow 法を鏡視下で行えるなら患者侵襲をより軽減出来ると考える。

論文要旨

関節鏡外科における最近の進歩は、肩関節前方脱臼において関節鏡視下バンカート修復 (ABR) は良い結果をもたらしてきた。しかしながら、最近の研究で ABR 後の 4~19% に肩関節脱臼が再発すると報告されている。2002 年 2 月から 2010 年 12 月に行った我々の調査でも、ABR 後の再脱臼率は 8.8% であった。

2011 年から我々は、接触スポーツを行う大きな関節窩を持つ患者か、上腕骨頭に骨欠損を持つ患者に、ABR+ オープンブリストロー法 (B) か ABR+ リムプレサージ法 (R) を行って来た。

2011 年 1 月から 2017 年 8 月までに肩関節動揺性の 84 症例に外科手術を行った。オープン手術 7 例と再手術 6 例、多方向に動揺性を持つ 2 例は除外し 69 例に電話調査を行った。追跡期間は平均 46.9 カ月 (13~92 カ月の期間) であった。ABR 単独手術は 61 例、B法を追加したのが 3 例、R法を追加したのが 5 例であった。電話インタビューは 61 例に行われた。再脱臼、再手術をした症例はなかった。ABR 単独症例の 4 例が術後動揺性を起こしたが、彼らの生活に影響のない範囲であった。

この研究で肩関節前方脱臼に ABR に B法か R法を追加した症例には、再脱臼は 0% であった。